



千葉労働動向

国鉄千葉動力車労働組合

〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号(DC会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043(222)7207 番
FAX 043(224)7197 番

2000.8.25 No. 号外

「四党合意」のための臨大反対

労働組合として、絶対してはならないことだ

国労闘争団のみなさん、国労組合員のみなさん、国鉄闘争を支援する労働者のみなさんに心から訴えます。

「8・26統開大会」の強行は、労働組合として絶対にやってはならない誤りであり、直ちに中止すべきです。

組合としてやっ てはならない!

「8・26統開大会」をめぐって問われているのは、「労働組合とは何なのか」という原点に他なりません。

「四党合意」は、そもそも解雇を認め、不当労働行為を認めて、労働組合であることを自ら放棄せよと迫るに等しい攻撃です。「四党合意」以降の全経過は、この本質を鮮明に示しています。

臨時大会自体が、国労が自主的に召集したのではなく、政府自民党など、最高権力者の指令によって開かれた前代未聞の大会です。そうである以上、自主的・民主的な議論や合意の形成、自由な討議など成立しようがありません。どんなに反対意見がでようが、怒りの声が噴出しようが、ただひたすら「四党

合意」を組合員に無理やり強制するだけのものです。

実際、7月1日の臨時大会では、本部の手で機動隊が導入され、「闘いつづけよう」と訴える闘争団・家族、組合員の必死の叫びは聞き入れられるどころか力で抑圧する対象としかみなされず、そのみならず「暴力行為」「暴徒」として非難され、「四党合意」承認をゴリおしする

ためだけに「統開大会」が召集されるという、とんでもない本末転倒が国労のなかで繰り返されてきました。

こんなやり方は、国労組織にさらなる憎しみを生み、団結のひびを拡大させるものです。労働組合として絶対にやってはならないことです。

労働運動再生への 突破口を開く

国労臨時大会での闘争団・家族の悲痛な叫び声、「演壇占拠」は、国労闘争団自らの尊厳をかけた全く当然の行動であり、国労の闘う団結を守りぬく闘いでした。そしてこの闘いは、政府・自民党やJRなど敵の目論みを一旦粉砕するという大きな勝

利の地平を切り拓きました。このすばらしい決起によって、戦後労働運動の中心を担ってきた

国労の首が皮一枚でつながり、闘う労働運動の再生への展望が大きく開かれたのです。

われわれは、一〇四七名の一人として国労闘争団・家族のこの決起を心から支持し、ともに勝利の日まで闘いぬくことを改めて決意するものです。

「四党合意」は 悪質な支配介入

「四党合意」は、一〇四七名の解雇撤回闘争を解体するために仕組まれた攻撃であり、国労そのものの変質・解体を狙う攻撃です。また同時にこの攻防戦は、国労という一労働組合をめぐる問題にとどまらず、日本の労働運動全体の未来に計り知れない影響を与えるものです。

「四党合意」とは、言うまでもなく国鉄分割・民営化以降一三年に及ぶ闘いの中で組合員や支援の仲間を訴え、裁判や労働委員会を主張してきたことの全てを自ら否定し、首切りと国家的

不当労働行為を認めると迫るものであり、伝統ある国鉄労働

運動を自らの手で葬れというに等しいものです。まさに全面屈服の強要であり、一〇四七名闘争を潰し、国労の組織そのものを自己崩壊させようとする大陰謀に他なりません。まさに、「四党合意」それ自身が労働組合への極めて悪質な支配介入であり、不当労働行為そのものにも他ならないのです。

労働者が結集で きる大きな幹

国鉄方式の首切りが横行し、国家承認のもとにリストラされるような法律が急ピッチで整備されている今日の状況の中で、「四党合意」を受け入れるということは、全ての労働者の権利を売りわたすに等しいものです。

今、連合支配の中で労働者は、権利を奪われ、好き勝手に首を切られながら、有効に反抗できずバラバラにされている状況にあります。しかし怒りの声は満ちており、それがひとつの大きな幹に結集したとき、必ず巨大な力が生まれます。国鉄闘争・国労の存在は、その大きな可能性を秘めているのです。

敵の側に矛盾が 集中している

7・1臨大での闘争団・家族のすばらしい闘いにより、政府・自民党、JRは大きな打撃を受けています。

矛盾に満ちているのは敵の側です。「完全民営化」の問題にしても、国鉄分割・民営化反対闘争の象徴として闘いぬかれて

きた一〇四七名闘争が残っていても成り立たせません。だから、「四党合意」の強制によって一〇四七名闘争を最後のに解体し、国鉄労働運動をこの世から一掃しようとしたのです。しかし、これも闘争団の渾身の決起で頓挫しています。

しかもJR体制は、JR貨物・三島の解決のつかない経営破たん、毎日のように事故や故障が発生して列車がまともに動かない状況など、鉄道会社として致命的な状況に陥っています。

労使関係でも、「一企業一組合」は完全に破産し、JR総連革マルは東日本からも切り捨てられようとしているなど、敵の側に分割・民営化以降の矛盾の全てが集中しているのです。

「四党合意」の 受け入れ拒否を

一〇四七名闘争に今、真に求められているのは、労働組合の自主性を放棄して政府与党に嘆願することでは断じてありません。われわれの闘いが生み出した「宝」として一〇四七名を守り組合員の団結に依拠して闘いぬくことです。

7・1の闘争団、国労組合員による「四党合意」粉砕の闘いを通して、国労の仲間たちは、自分たちの真の力を行使し始めました。この闘いをさらに推し進めることによって敵の側は困りはて、譲歩するしかないと追いつまされるのです。「四党合意」の大陰謀を粉砕し、一〇四七名闘争の勝利をかちとるためにともに闘いぬこう。